

事例 11 高等学校のOJT実践事例

若手教員に進路指導の役割を与えることで、進路指導力向上を目指す
【進路指導部のベテラン教員として】

本校では、進路指導部主催で3年生の志望校検討会や出願校検討会を行っている。検討会に臨むに当たり、負担の大きい3年担任を支援する役割の「チューター」を、進路指導部員の中から各担任に一人ずつ割り当てている。「チューター」には若手教員や新任教員を指名し、進路指導の経験が豊富なベテラン教員は「サブチューター」としてその補佐役に回る。あえて若手教員等に役割を与えることで進路指導力の向上を図り、役割を果たした達成感を通してさらなる成長を目的としている。

〈取組の内容〉

○年2回の志望校検討会（7月・12月）に向けての取組

- ・チューターは、生徒の適性や将来の希望を基に、生徒が志望する大学について調べる。サブチューターは適宜、確認や助言をする。
- ・チューターが考えた原案を、事前に進路指導部内で検討する。経験豊富なサブチューターが助言しながら一緒に検討することで、担任へ情報提供や提案を行う際には、チューター個人の意見ではなく、進路指導部の意見として自信をもって伝えられるようにする。
- ・検討会では、提案内容を基に志望校に合格するために今後どのような取組が必要かを、参加者全員で議論する。

○出願校検討会（1月）の開催

- ・チューターは、生徒の3年間の成長過程やこれまでの進路指導の取組を踏まえて出願校について分析し、サブチューターの助言を受けた後、検討会で提案する。

これが成功の鍵！

⑥役割を与える、仕事を任せる

進路指導の経験の少ない教員がチューターを経験することで、生徒の思いを実現させるための指導について学び、今後に生かせる進路指導力を身に付けることができました。

②ほめる、認める、達成感を与える

生徒が進路実現できたときは、チューターも大きな達成感を得られます。その経験が、今後の進路指導への意欲の喚起につながりました。

【若手教員の声】

この学校に赴任し、進路指導がとても不安でしたが、チューター業務を通して進路に関する様々な勉強の機会をいただきました。おかげで、実際に担任になった際には、的確なアドバイスができました。チューター業務を経験したからこそ、今の自分の進路指導力があると感じています。

【3年生を担当する中堅教員の声】

3年生担任の進路指導は何度やっても不安で大変な業務です。しかし、以前のチューターの経験が自分のクラスの進路指導に生きています。また、チューターの先生から、大学の学部改組などの最新の情報だけでなく、進路に関して自分とは異なる視点のアドバイスを受けることもあり、とても助かります。



志望校検討会の様子

〈取組の成果〉

- ・若手教員はチューターを経験することで、3年間を見通した進路指導の手法を学ぶことができた。また、サブチューターのベテラン教員も、進路指導業務全体を見通した新たな学びができた。
- ・チューター経験者が担任となった時に、クラスの生徒や保護者に対して自信をもって進路指導のアドバイスができるようになった。
- ・チューターを経験した若手教員が、後にサブチューターとして育成する側に回るという、育成のサイクルを確立することで、進路指導のノウハウが継承されるようになった。